

序の舞

宮尾登美子

下



序の舞

下



宮尾登美子

昭和五十七年十一月三十日 第一刷発行
昭和五十八年二月二十日 第五刷発行

序の舞 下

定価 一二〇〇円

著者	宮 尾 登 美 子
挿画	村 良 之 介
装丁	熊 谷 博 人
発行者	初 山 有 恒
印刷所	明 善 印 刷 株 式 会 社
発行所	朝 日 新 聞 社

〒100 東京都中央区築地五―三―二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

© T. Miyao 1982

0093-255043-0042

Printed in Japan

目次

男児誕生	5
四十の恋	90
ぬかるみ	172
橘花の綬	248

本書は昭和五六年五月十一日から昭和五七年八月三十日まで朝日新聞夕刊に連載されたものである。

序の舞
下

男児誕生

明治三十五年の正月が過ぎると雪おこしの寒さがやって来、桜の花びらのような雪花が舞ったあとは必ずいちめんの雪景色となる京の一月、その溶けかけた雪を見ながら雪見炬燵の出会いが一度あってのち、松溪とはしばらく会えなかった。

「年寄ると寒さがこたえるさかいなあ」

と二月は休み、三月はお水取りの頃、一度会つてのちまたしばらく休みが続いたが、こんなに間遠になると以前のように、会った日に次を約すこともできなくなり、おぼつかなく別れてしまう。

それでも津也はいつも松溪からの一方的な連絡を承知して待ち続け、自分から催促することはなかった。松溪はよく、

「あんたはええ子や。絵描いてるさかいガツガツせんもんなあ」

と津也の頭を撫でるようにいつていたし、また松溪はこの頃とみに老いを口にするようになっていた。

男の五十代を、人生の終焉と観じる人もあればまた積年の収穫を見る充実期と考える人もあり、

松溪の場合は体こそまだ壮健ではあるものの、京都画壇では既に半ば現役を退いた印象があった。

何しろ太鳳ら若手画家が相集い、青年絵画共進会を作って以来、徐々に新旧作家の交替がなされて来つつあり、寛斎亡く竹堂亡くまた魁嶺みまかり、欧州帰りの燦たる新星太鳳を中心に新潮漲り寄すという情勢にあってみれば、次第に地位の後退してゆくのも無理のないところがあった。

津也が太鳳の名を口にしただけで不快そうに眉根を寄せることもしばしばあり、それは宿敵魁嶺門下の高弟だったということだけでなく、技量も人氣も眩しいほどの昇り坂にある後輩への嫉みであることは判っている。

その年の四月、去年「獅子」で話題を呼んだ新古美術品第八回展に太鳳は「和蘭の春伊太利の秋」の六曲一双を出品し、そのコロを思わせる構図と手法で人々を魅了し、一等を獲得した。

津也は松溪の、

「あんたの師匠を悪ういいとうはないけど、太鳳さんの西洋かぶれにも困ったもんやな。自分ひとりで西洋画の真似してるぶんにはべつにかまへんけど、騒ぎ立てると若いもんが見習うさかいなあ。いまに京都中の絵描きが皆あんなふうな絵描きでしたら伝統もなにももうなってしまうわ」

憤慨に耐えぬ、という口ぶりなのを、津也はその枕許で帯を結びながら、

「そやけど先生、太鳳先生は西洋行かはってからよけい日本画のよさが判るようになったていうてはりますし、絵具も岩絵具ばっかりにこだわらんと、水干やら顔彩ももっと自由に使うたらええと弟子には教えてくれてはりますのえ」

といってから津也はハッと、あ、それをいうたらあかなんだ、と思ったが、もう口から出た言葉は消しうがなかった。

「何やて」

と松溪は蒲団をはねのけて起上り、寢床の上にどっかりあぐらを掻いて、

「わしの前であんたようそんなことがぬけぬけいえるなあ。あんたがこんにちあるは、一体誰のおかげや思てるねん」

と怒気をあらわにしていったとき、津也は手をついて詫びたらよかったかも知れなかったが、馴れた仲のことでつい、

「いや何もうちは先生のことというてるのやあらしまへん。ただ太鳳先生の絵は」

というのへおっかぶせて、

「いらいでよろしというてるやないか。あんた案外、ものの判らん女子やったんやな」

と立上り、あとは一切無言ですぐさま帰り支度であった。

着物、帯、とさし出す津也の手を払い除け、あわてて着る着物は前褌下り、衿もとも乱れていたが、それをつくろいもせず、羽織に手を通してながら足音荒く出てゆく松溪を見送って、津也は取りつくしまもなかった。

花冷えの時節、一人残された津也は火鉢の火をかき起して手をさしのべながら、つくづく男と女の関係はむずかしいもんやなあ、と思った。

愛し合わなければこういう関係には陥らないのに、こういう関係に陥ってまで絵描き仲間の意識は捨て切れず、まして師弟のへだたりはどこまでもついて廻ってくる。

ただの男と女やない、という津也のいささかの誇りは、同時に、どんな悦楽の時間でも相手が旧師である意識を捨ててはならぬという厄介な氣づかいへつながってゆくのであった。

松溪の氣むずかしさは画学校の昔からよく判っているつもりだったのに、今夜はその氣づかいを忘れてたかも知れへん、あと追いかけて行つて謝りまひよ、とは思つても、花の頃ならまだ往來に

は人通りもあり、人目を憚る身ならそういう真似はできなかった。

原因が絵のことに関わっているだけに、これを想い合う仲の小さいかい、などとはいっておられず、かといって便りひとつできぬ不自由をかこちながら日が経ってゆく。

まもなく五月に入り、その朝、津也は井戸端で顔を洗おうとして突然むかむかし、思わずしゃがんで地面に吐いた。

朝飯前のことでまだ胃袋には何もなく、出たものは黄いろい胃液だけだったが、口のまわりを汚したその涎のような液を手拭いで拭きながら、津也は真暗な絶望の淵の底へ体ごとひきずり込まれるような気がした。

既に一度経験したあの妊娠の疑いはもはや濃厚で、それは三月以来、月のものが滞っていることでずっと案じつづけていただけに、前回には全く感じなかった悪阻の症状をみたことで決定的であった。

津也は吐いたあとの胸の喘ぎを鎮めながら、しかしそれでもまだ、ひょっと何かの間違い、という気も捨て切れないでいる。松溪は女の体のことに詳しいし、それに頼って許して来たのだったから、妊娠なんてあり得ようはずがないと思う気持がある。

前回は胎動をおぼえるまで何にも知らなかったけれど、あれから十年も経てば悪阻の様子というのまほば察しがついている。そうでなくてさえ月ものを見ないことをずっと気に病んでいる矢先だったから、津也の混乱はいいようもないものであった。

寝乱れ髪を撫でつけるゆとりもなく、寝床を上げている勢以のところへよろめきながら歩いてゆき、

「お母ちゃん、今日はいち寝さして。おなか痛いし、気分わるうてかなわんさかい」

ともとの寢床へ入ると勢以は驚いて、

「なんぞあたたったのかいな。昨夜は生ぶしとおだいの煮いたんで、いつも食べてるもんやったし、おかしいな」

といいつつも、

「つうさんが寝込むのはほん珍らしことやなあ。千ぶりでも煎じよか」

と鴨居に吊り下げてある薬草を下ろすのであった。

女の寝態^{ねぐさ}について、枕を落すな、蒲団は首まで、かぶったらあかん、と日頃からやかましくいわれていても、今日だけは暗黒こそ欲しく、蒲団を頭の上まで引きあげじっと目を閉じていると、心はその闇の奈落を底なしに下降してゆくのが判る。

もし妊娠だとすると、松溪のいう受胎しない日というのはあれは嘘だったのか、と疑い、そしてすぐ、先生が嘘を吐くはずがない、と打消し、その激しい相克のために体は硬直してふるえ、顔だけが熱く火照ってくる。

前回はまだ十八歳だったし、世間知らずだったといういい逃れも利いたけれど、いまはもう二十八歳、すべては自分の責任であって、どんないいわけも通らないことも判っている。どうしよう、どうしたらええやるか、と体中から知恵を絞り出すようにしても何の妙案もなく、考え疲れてくると、まだ妊娠と決まったわけやない、何ぞの理由で月のもんが滞ってるだけや、と無理にも自分を宥めつけようとするのであった。

勢以のすすめに従って苦い千ぶりを飲みやると起上ってはみたものの、人のいう悪阻とはまさしくこれかと思ひ知らされるように胸のむかむかは募るばかり、志満がそれのときよくいっていたように、

「温い御飯の匂い嗅いだらすぐげーやね」

に似て、津也も朝、焚きつけた釜の飯が噴き出し、その匂いが家中に漂うだけでもう食欲を全く失くしてしまふ。

前回は何の兆候もなかったのに、今度のこの様子はというわけか、と自分の体をもてあましてながらも勢以の手前たびたび横になることはできず、精一杯気張っていることもいっそう体にこたえてくる。

津也は思い惑った末、やっぱり松溪に相談するしかないと考え、男の偽名を使って一夕、例の初花に呼び出すことを決心した。幸い津也の筆蹟は男文字のように元氣よく達筆だし、万一弟子たちに開封されても差支えないように、内容も充分考えたものであった。

冠省、書面にて唐突なる御願いの儀、何卒御寛恕下され度候、私儀、かねてより先生の御作品に傾倒致し居ります者とて、もし叶いますれば一夕御拝眉の上粗餐さし上げたく、甚だ勝手ながら左の日時、木屋町花初にてお待申上候、なお、当家出入りの表具師某も御同席お許し下され度候。

これだけの文面を、勢以の様子を窺いながら津也はいく度書き直したことだったろうか。

如何にも金持ちの蒐集家らしく、当家出入りの表具師を配したり、初花を花初と書いたり、しかも勢以の足音がすればすぐやめて絵絹の下に隠さねばならないし、身も細る思いでや々と書き上げ、四条通りの赤い郵便ポストに投げ込んだとき、津也は絵の大作を終えたあのような脱力感があつた。

松溪はこの手紙を見てすぐに了解するはずだけれど、しかし来てくれるかどうかは判らなかった。花の頃の、あの小さいきかい以来連絡は途絶えているし、あいにくその夜は他用があるかも知れず、考えてみればずい分危険な手段だけれども、津也はいまそれより他方策は立たなかった。

頼みの綱は、松溪に盛子の話を打明けた際、いかにも残念そうに「何故わしに相談してくれなんだ」と責任ある態度を見せてくれたことで、今度もきつと、世馴れた松溪のことなら、この真っ暗な目先に光明を与えてくれるにちがいないと思うのであった。

その日は六月一日、貴船神社の神輿の渡御がある日で、津也は日が暮れてのち初花へ急ぎながら、ふとまだ太鳳洋行のお礼参りにも行っていないことを思った。

いつもの座敷に通されて待つあいだ、ここで出会いを重ねて来た年月にはついぞ覚えなかった苛立たしさを感じ、それは悪阻の気分わるさと、また果して松溪が現われるかどうか判らないことから来ているためではなかったろうか。

障子を細目に開けて川の面の灯りを眺めているうち時間はどんどん経ち、やっぱりあかんかったかしらん、と帰り支度を始めたとき、廊下を歩いてくる音が聞えた。

障子を開けるなり、

「あんた大胆なことするなあ」

という声は決して不機嫌ではなく、

「わしに会いたかったんやろ。しばらくご無沙汰やったさかい、さびしかったんか」

と津也の帯へさっそく手をかけようとするのを制して、

「先生、今日のご相談したいことでしましたさかい、どうぞ聞いとくれやす」

と改まるのを見て松溪は、

「何やね。絵売って欲しいんなら次の廻りにしてや。いま光彩堂もいっぱい抱えてんのやさかい」という顔はどこかで盃を持たされたらしくうっすらと赧くなっている。

絡みついてくる松溪の手を払いのけながら津也は、

「絵やおへん。うちどうやらややがでけたらしゅうございます」

津也の言葉は、微醺を帯びている松溪の耳を一度は素通りしたらしく、「そうか、そうか」とやり過ごしていてややがて気がつき、

「え？　ほんまかいな」

と急に引き緊まった顔つきになった。

先生喜ばはるかも知れん、とほんの一筋望みをかけて来た津也の前で、松溪はゆっくりと懷から巻煙草を取り出し、無言で火鉢の火でそれをつけ、天井に向って青い煙を吐き出したあとで口にしたのは、

「あんた、それ誰の子や」

という言葉であった。

信じられない言葉として顔を上げた津也とは視線を合わさぬようにして松溪はもう一度、

「誰の子かと聞いているのや」

といい、津也はあまりのいい分に、

「先生、そんな」

と口ごもるばかり、それに乗じて松溪が浴びせたのは意外なものであった。

「あんた、わしが何にも知らん思うてゐるのやろ。あんたが太鳳さんと関係あること、わしが気がつかへんとたかをくくってゐるのやなあ。

わしと寝たあとで、あんたが鏡のぞいて唇につけてゐるそのけったいな紅は何や。太鳳さんの西洋土産やないか。あんたが太鳳さんの画室へ朝早う模写に入ること、京都の絵描き仲間では誰ひとり知らんもないくらい広まってる話やで。

数えたらまだまだおすにゃ。太鳳さん洋行のとき、軽女別れの図描いたんもわしが見たら一目瞭然や。女の絵描きていけずうずうしいとわしはそのとき思たんやけど、まあ『母子』描かしたんもこれはわしのせいやさかいなあ。

なああんた、ややの話をわしに持つてくるのは見当違いちゅうもんやおへんか。わしは最初から妊娠には注意せえいうてあんたにいうたあるし、またそれによって逢うて来てる。間違うたらあかんえ」

と激しい言葉を吐く松溪の顔を、津也はあっけにとられながらまるで別人を見るような目で眺めた。

これが、この目の前のひとが、ついさき頃まで津也を「掌中の玉や」といつくしみ、「何でも困ったことがあったらいうて来てや。力になるさかい」

と慈父のやさしさを見せたひとだったのか、と疑うほど、それは冷酷ないいかたであった。

松溪はさらに、薄笑いを浮かべながら、

「あんたも若いときは可愛かったけど、ずいぶんと擦れて来たなあ。

わしも経験あるけど、祇園や先斗町の妓は関係した男全部にあんたのややや、ちゅうて迫るんやて。純情な男はそれ信じてしもて、手切れ金の引き取るのと大騒ぎするそややけど、わしはあいにくでなあ。

手のうち見えてるのや。わるいけど」

とこちらを見下げ果てたいいかたを見て、津也は次第に頭に血の上ってくるのを覚えた。

「先生、そのおっしゃりようはあんまりどす。

いくら何でもあんまりどす」

と唇をふるわせつつ、あとの言葉が出ない津也を悠々と見やりながら、
「ほなあんた、太鳳とは何の関係もおへんてここでいえるか。いえんやろ。」

わしな、いまそういうことを糾明しようとしているのやあらへんで。いつともいうてるように、絵描きは恋もせなあかんし遊びもせなあかんけど、ただ、ややがでけたことの責任をわし一人に持つてくるのはお門違いやというてるだけやねん。

判ったな、あんた聞き分けのええ子やもんなあ。判ったらさあ、隣の部屋へ行こ。わし今日は元氣やさかい」

と巻煙草を灰のなかに差し、津也の手を取って引き立てようとするのを、津也は激しくふり払って立上った。

これが男の正体やったんか、と目もくらむような怒りにふるえつつも、相手が旧師だけに卑怯者、ろくでなし、と痛罵することのできぬ苦しさに悶え、かろうじて、

「先生、うち先生を見損のうてました」

とだけの一矢を報い、身を翻して部屋から走り出た。

生あたたかい夜気のなかを走り続け、やっぱり津也が一息つける場所といえは河原のごろごろ石の上より他なく、足首をくねらし鼻緒の切れた拍子に津也はへたとそこを崩折れてしまった。

玉家での再会の日、津也の氣持をたちまちにして解かしたのは松溪の、

「ややのでけたこと、何でわしにいうてくれなんだ」

というさも真情溢れる言葉だったのに、一皮めくればその下には、ひとときの歓楽をむさばればそれでよろし、面倒な話はごめんや、という男のずるさを秘めていたことがいまありありと見えたとした。